




# 祈り・藤原新也

展示作品目録 | 2022年11月26日(土) — 2023年1月29日(日) | 世田谷美術館〈1階展示室〉

凡例：記載はサムネイル、作家の言葉、撮影地、撮影年、寸法(ヨコ×タテ、mm)、印刷方法の順。\*作家の希望により、実際の展示と本リストが異なる場合がございますこと予めご了承ください。






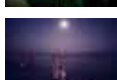

## 序章

	スイッチオフ 第一回緊急事態宣言。街から人が消えた。高架橋から眺める渋谷の街は、どこかの巨大な配電盤がスイッチオフしたかのような静寂に包まれている。 2020年4月6日 渋谷(東京)	渋谷 (東京都)	2020	2000 × 1333	ジクレー
	かみさま 人間のみが創り出した、かみさまという不思議な想念。気候変動カタストロフ。ウィルス禍、戦争。地球規模の瀕死のこのとき、それでもなおかつそこに、かみさまはいるのか。あるいはいないのか。	奈良県	2009	3000 × 2000	ジクレー
	世界のはじまり バリ島の山中。無人の沼に半身を浸かり、朝の暗いうちから蓮の花の咲くのを待つ。東の空にあかね色がさしはじめると、それに呼応するかのようにゆっくりと蓮の花弁が広がりはじめる。世界のはじまりは、こんなにも美しいのかと息を飲む。	バリ島 (インドネシア)	2020	3000 × 3000	ジクレー

## Memento Mori

### 死を想え(メメント・モリ)

インドの聖地バラナシ。諸国行脚を終えたひとりの僧が自らの死を悟って、河原に横たわる。夕刻のある一瞬、彼は両手を上げた。そして両手指で陰陽合体の印を結び、天に突き出す。その直後、彼は逝った。死が人を捉えるのではなく、人が死を捉えた。そう思った。

		インド	1973	840 × 560	ジクレー
		インド	1970	840 × 560	ジクレー
		インド	1970	840 × 560	ジクレー
		インド	1970	840 × 560	ジクレー
		インド	1970	840 × 560	ジクレー
	火葬 ガンジスの川辺。精霊歌とともに次々と死体が運ばれて来る。死体から火と煙が立ち昇った。肉の焼ける匂いが鼻をつく。焼けた灰は箒でサッとはかれ、川に捨てられた。来る日も来る日も見続けた。そして死への恐れが日ごと遠ざかっていった。	インド	1970	840 × 560	ジクレー
	[書: 藤原新也]		2010	3030 × 1700	麻紙
	ともしび ガンジスの岸辺。ひとりの老人が死者に線香を手向けるためにマッチを擦る。川風から火を守るように囲うそのてのひらは聖なる彫像のように美しい。	インド	2011	2000 × 1333	ジクレー
	遠くから眺めるとニンゲンが燃えて出すひかりは、せいぜい六〇ワット三時間。	インド	1973	2000 × 1333	ジクレー
	あの人骨を見たとき、病院では死にたくないと思った。 なぜなら、死は病ではないのですから。	インド	1970	2000 × 1333	ジクレー
	最後に焼け残る背骨の一部。少年の喪主が川に分け入り、青空に向け遠投。まるでスポーツの一場面を見ているかのようだ。	インド	1970	2000 × 1333	ジクレー
		インド	1970	1500 × 1000	ジクレー
	月の明かりで手相を見た。 生命線がくっきり見えた。	インド	1973	1500 × 1000	ジクレー
		インド	1973	1500 × 1000	ジクレー
	ニンゲンは犬に食われるほど自由だ 水葬された死者がガンジス川の中洲に打ち上げられ、それを野犬の群れが食う。アリの群れが死んだ昆虫に群がる光景と同じように見えた。その瞬間、わたしはヒトの命の重荷から自由になった。	インド	1973	3000 × 2000	ジクレー

折

[書:藤原新也]

折り

大震災に続く原発事故。世界を襲うコロナ。頻発する大洪水や森林大火災。熱波来襲。氷河の崩落。台風の巨大化やサンゴ礁の白化。そして人間世界における強権弾圧と戦争。これら複合災禍による世界経済の迷走。歴史上まれに見る天変地異の時代である。わたしが世界放浪の旅に出た今から半世紀前、世界はまだのどかだった。自然と共生した人間生活の息吹が残っていた。幸いにもわたしはそんな日々を旅することができた。そして一心に写真を撮り、言葉を発した。ときには死の危険を冒してさえ、その世界に分け入ったのは、ひょっとすると目の前の世界がやがて失われるのではないかという危機感と予感があったからかもしれない。その意味において、わたしにとって目の前の世界を写真に撮り、言葉に表すことは“折り”に近いものではなかったかと思う。

藤原新也

2022 2500 × 4000 テンション  
プリント



## Memento Vitae

生を想え (メメント・ヴィータ)

灼熱の太陽の光を受けたくさんの命がキラキラと輝いている。人々の快活な声や、笑顔や、怒りや、驚きや、楽しみや、悲しみや、いっぱい喜怒哀楽はきっと頭上の太陽の賜物だ。



インド 1973 1030 × 686 ジクレー



インド 1973 1030 × 686 ジクレー



インド 1973 1030 × 686 ジクレー



インド 1973 1030 × 686 ジクレー



インド 1973 1030 × 686 ジクレー



巨大なガジュマルの樹に巣食う数々の生活を見た。その背後に湧き上がる巨きな雨雲を見た。人間どもに挑みかかる烈しい象を見た。象を征服した気高い少年を見た。象と少年を包み込む高い森を見た。世界はよかった。大地と風は荒々しかった。花と蝶は美しかった。

インド 1973 1030 × 686 ジクレー



書行

日本各地にはじまり、中国大陸、そしてインドの路上で書を書いた。インドでは聖地バラナシでいきなり書紙を広げ「大地」と揮毫した。大勢の人々を取り巻きはじめ、大道芸を食い入るように見つめる。警官がわたしを追い払うかと思いきや、逆に交通整理をして書行を見守ってくれた。何よりも驚いたのは携帯で写真を撮っている人が一人もいないこと。誰もが自分の二つの眼で見ようとしているのだ。そのたくさんの方の視線はわたしのエネルギーへと変る。

インド 2011 2250 × 1500 ジクレー

大地

[書:藤原新也]

2011 2000 × 3000 麻紙



インド 2011 3000 × 2000 ジクレー



信じることの愚かさ。信じることの賢さ。

インド 1973 3000 × 2000 ジクレー



サドゥ(聖者)が三日月型に割ったスイカをなんと皮の側から食っていた。生まれてはじめてスイカを皮の側から食らう人間を見た。だが、なぜスイカを皮の側から食ってはいけないのか。ふと、自分に問い返す。

インド 1971 840 × 560 ジクレー



インド 1973 840 × 560 ジクレー



あの人がさかさまなのか、わたしがさかさまなのか。

インド 1973 840 × 560 ジクレー



インド 1973 840 × 560 ジクレー



インド 1973 840 × 560 ジクレー



インド 2011 840 × 560 ジクレー

## チベット



天空 (チベット高原)

インド亜大陸の命の渦に巻き込まれながらいつしか天空の方を見る。この世からあの世。たったひとりの天国ツアー。四千メートルのチベット高原。聴覚を失ったかのような静寂。落ち込みそうな深い群青の空。群青に浮かぶ白い雲の惑星。湿度ゼロの山と谷。寡黙な人々の口が唱え続ける呪文。オムマニベメフム。虚空を見ている僧。千年の寺に一夜を明かすわたしは色も形も音もない夢を見た。

チベット高原 1975 1500 × 1000 ジクレー



ポラロイドが出会ったチベット高原の人々  
発売と同時に話題となったポラロイドカメラ SX-70 をチベット高原に携帯し、土着の人々を二枚ずつ撮り、一枚をプレゼントし、一枚を保管。最新テクノロジーとネイティブの人々の出会いが不思議な緊張感を生む。

チベット高原 1975 1800 × 800 ポラロイド



寿命とは、切り花の限りある命のようなもの。

チベット高原 1975 3000 × 2000 ジクレー



人体はあらかじめ、仏の象を内包している。

チベット高原 1975 483 × 322 ジクレー



光の中で、正気にもどる。

チベット高原 1975 483 × 322 ジクレー



チベット高原 1975 483 × 322 ジクレー



チベット高原 1975 483 × 322 ジクレー



クショ・バクラ大僧正。チベットからラダックへの逃避行のとき、民を引き連れ、大蔵経すべてを暗記した偉人。大僧正のお付きにお願ひし、来迎図のような形の演出写真を撮った。

チベット高原 1975 2000 × 1333 ジクレー



チベット高原 1975 483 × 322 ジクレー



チベット高原 1975 483 × 322 ジクレー



チベット高原 1975 483 × 322 ジクレー



チベット高原 1975 483 × 322 ジクレー

## 逍遙遊記

アジア漢字文化圏の旅  
イスタンブール、インド、チベットを経て日本への帰路、ゆっくり、ゆっくりと漢字文化圏を逍遙。その名もなき場所は、日本の匂いがした。

### 台湾



台湾 1976 528 × 426 額外寸 ジクレー額装



台湾 1976 528 × 426 額外寸 ジクレー額装



台湾 1976 528 × 426 額外寸 ジクレー額装



南洋のさざなみ、台湾

台湾 1976 528 × 426 額外寸 ジクレー額装

入江のさざなみ。青い稲穂の広がりが。霧雨の中をさす少年の傘。車窓の向こうをよぎる花々。曇り空の下の猫。夕まぐれの町。誰もいない食堂。そんな町の安宿に泊まり、自分が無名であることの安堵感を味わう。



台湾 1976 528 × 426 額外寸 ジクレー額装



台湾 1976 528 × 426 額外寸 ジクレー額装



台湾 1976 528 × 426 額外寸 ジクレー額装

### 香港



香港 1977 528 × 426 額外寸 ジクレー額装

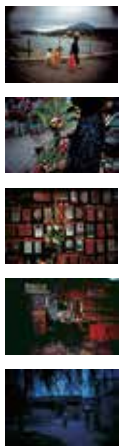
ニンゲンの増埒、香港

排水で淀んだ内海。水面をぬるとよぎる伝馬船。骨が擦れ合うような櫂の音。テント舟から聴こえる赤子の声。ビル壁にへばりついた百年の染み跡。笑っている店先の豚の頭。その上に居並ぶ首吊り鳥。賭博の音。上海蟹の肩。ピータンの腐敗臭。蛇のスープ。ビルの窓から投げ捨てられるゴミ。密入国者のバラック。女の立ち食い。虚空を睨んでいる男。寺の壁いっぱい死者の写真。染みついた線香の匂い。今はなき、あの懐かしい香港のカオス。

香港 1977 528 × 426 額外寸 ジクレー額装



香港 1977 528 × 426 額外寸 ジクレー額装



香港	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
香港	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
香港	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
香港	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
香港	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装

## 朝鮮半島



子守唄が聴こえる、朝鮮半島  
 朝鮮半島のゆるやかな山並みのこちら側にはいつも子どもをおんぶした母親がたたずんでいる。母子一体化したその「愛の象」が山裾、河原、田畑、市場や道端、半島のいたるところに、道祖神のように立っている。

朝鮮半島	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
朝鮮半島	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
朝鮮半島	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
朝鮮半島	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
朝鮮半島	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
朝鮮半島	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
朝鮮半島	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
朝鮮半島	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
朝鮮半島	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装
朝鮮半島	1977	528 × 426 額外寸	ジクレー 額装

## イスタンブール

イスタンブール。ギリシャから連絡船に乗る。吹雪で対岸は見えない。霧笛とともに船がギリシャの岸を離れ、船は海峡半ばを越える。そのとき聲を聴く。野犬の遠吠えだ。懐かしい感情が過ぎる。ヨーロッパにない野生の聲に耳を傾けながら、そこにアジアの聲を聴いたのだ。やがて吹雪の緞帳りのむこうに薄っすらと尖塔が現れる。モスク。尖塔から流れるアッラー・アクバルの祈りの声が、野犬の遠吠えと交わった。



人間は肉でしょ、気持ちいっぱいあるでしょ。

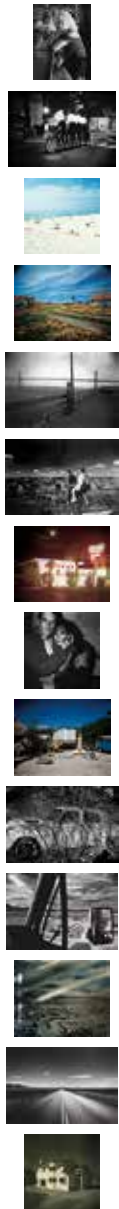
トルコ	1979	2000 × 1333	ジクレー
トルコ	1979	2000 × 1333	ジクレー
トルコ	1979	600 × 400	ジクレー
トルコ	1979	600 × 400	ジクレー
トルコ	1979	600 × 400	ジクレー
トルコ	1979	600 × 400	ジクレー



トルコ	1979	2000 × 1333	ジクレー
トルコ	1979	600 × 400	ジクレー
トルコ	1979	600 × 400	ジクレー
トルコ	1979	600 × 400	ジクレー

## アメリカ

1989年。モーターホームを操って九ヶ月間、全米を回る。ポップコーンのように軽いカリフォルニア。野卑と無知の広大な内陸。行けど尽きない砂漠の道。たぎるような民族の坩堝ニューヨーク。軽薄な楽園フロリダ。この濃密な旅で、十年分のアメリカを見た。



アメリカ	1989	1500 × 1994	ジクレー
アメリカ	1989	1030 × 703	ジクレー
アメリカ	1989	1183 × 1183	ジクレー
アメリカ	1989	1500 × 1183	ジクレー
アメリカ	1989	1030 × 703	ジクレー
アメリカ	1989	1030 × 703	ジクレー
アメリカ	1989	1500 × 1183	ジクレー
アメリカ	1989	1500 × 1183	ジクレー
アメリカ	1989	1500 × 1183	ジクレー
アメリカ	1989	1030 × 703	ジクレー
アメリカ	1989	1030 × 703	ジクレー
アメリカ	1989	1500 × 1183	ジクレー
アメリカ	1989	1030 × 703	ジクレー
アメリカ	1989	703 × 703	ジクレー

## 香港 雨傘運動

香港に渡る。早朝から夕方まで現場を駆けまわり、写真を撮る。夜ホテルに帰り、夕食もそこそこに数百カットの写真を編集する。タブレットで写真に言葉を殴り書きする。即ネット配信。その日の出来事がほぼリアルタイムで目に触れることになる。“運動”を伝える最適な方法だった。取材の終わりの日々には学生たちと一体となって活動している気持ちになった。だが中国政府は運動を弾圧し制圧。今日では何事もなかったかのような寒々しい平穏の中で若者たちは失意の日々を送っている。だが、かつてのあの六十年代を彷彿とさせる若者たちの恐れを知らない情熱がそこにあった事実は決して消えることはない。



周庭

周庭さんは年に一度、年末から正月にかけて日本にやってきました。その都度私のアトリエを訪ねてきてくれ食事なども共にした。だが何度も会っているうちに、彼女はイデオロギーによって動いているのではなく単純に普通の人として間違っただけを間違っていると言っているだけなのだということが分かった。その彼女の背後に巨大な強権国家があり、今にも襲いかかろうと体勢を整えていることも彼女は知っているはずだ。だがその不安はおくびにも出さなかった。そこに日本の女の子とは異なる大陸方面の芯の強さを感じた。いま彼女は24時間体制で当局の監視下に置かれている。普通の女性である彼女が一刻も早く自由の身になることを願う。

香港	2018	1500 × 1000	ジクレー
----	------	-------------	------





藤原新也はここ数年、渋谷ハロウィン取材している。ただの取材ではつまらないからと、自らもコスプレ姿で参加している。2015年はヤクザコスプレで、2020年のコロナ時は時代を表すかのように完全防護服姿で参加した。

渋谷 (東京都)	2015	450 × 300	ジクレー
渋谷 (東京都)	2015	450 × 300	ジクレー
渋谷 (東京都)	2015	450 × 300	ジクレー
渋谷 (東京都)	2015	450 × 300	ジクレー
渋谷 (東京都)	2015	450 × 300	ジクレー

映像

## いま

この時代。長年の旅から帰国し、日本の現実と正面から向かい合う。その最初のショットは家族崩壊のはじまり。



金属バットの家  
1980年11月29日。受験戦争の少年が親を殺した。川崎市宮前平。金属バット両親撲殺事件。アジアの旅から帰国後、大型カメラを担いで現場に向かう。台風一過の日本晴れの下、建売広告写真のような手法で金属バットの家を撮る。それはこの家が特殊な家ではなく、誰もが陥る可能性を秘めた「普通の家」だからだ。  
1980年 川崎(神奈川県)

川崎 (神奈川県)	1980	1500 × 1170	ジクレー
--------------	------	-------------	------



「東京漂流バスター」  
作者：藤原金太郎(藤原新也)

不詳 500 × 360 絵画作品



渋谷 (東京都)	2008	900 × 600	ジクレー
-------------	------	-----------	------



千葉県	2002	900 × 600	ジクレー
-----	------	-----------	------



千葉県	2002	900 × 600	ジクレー
-----	------	-----------	------



死ぬな生きろ  
ヒトの命には八十年というタイムリミットが仕掛けられている。たった一回の短い人生。死んだがごとく生きるな、という意を含め「死ぬな生きろ」の書を揮毫し、渋谷スクランブル交差点上のデジタルサイネージに映し出す。その直後、東日本を巨大な津波が襲い、死ぬな生きろの願いはその意味に変化を来す。それから十年後、ウィルスの蔓延は死ぬな生きろの揮毫を、より切実なものとする。 2010年3月 渋谷(東京)

渋谷 (東京都)	2010	800 × 600	ジクレー
-------------	------	-----------	------



小保方晴子  
2014年4月9日、STAP細胞捏造疑惑で世間を騒然とさせた小保方晴子は大阪市内のホテルで記者会見を開いた。記者たちは彼女の嘘を暴こうとその三時間STAP細胞ありやなしの質問に終始する。徒勞の三時間だった。わたしはその三時間、彼女の表情だけをひたすら注視する。お開きになって会場を出ようとすると、テレビのスタッフがカメラを回しながら感想を求めてきた。「彼女は嘘をついてないよ。表情を見れば明らかだ」わたしはそう言って会場を後にした。

大阪府	2014	2200 × 1466	ジクレー
-----	------	-------------	------



三浦百恵  
長年の芸能界活動を終え“普通人”となった山口百恵はたった一度だけカメラの前に立った。ファインダーの向こうのわずかに潤んだ瞳の彼女の表情は微妙にゆれていた。芸能界を去り、家庭を持つ未知の生活に踏み込む不安と期待のゆらぎ。そんな感情の機微が写り込んでいるその一枚のショットを人生の大切な写真と百恵は言った。 1983年 東京

東京都	1983	2500 × 1500	ジクレー
-----	------	-------------	------



大島優子  
とつぜん雲行きが変わり、雨が降り、風が吹いてきた。それまで晴れたホームのベンチでまるでピクニックでも行くかのように笑顔だった彼女は、風吹き雨降りしきる中、指示することもなく自ら一転その表情を変える。大島優子のこの苦渋の表情。それが偽ものの演技でないのは、過去の経験値がその表情にある種のドキュメントを生んでいるものと思われた。仮にそれがにがい経験であろうと、演技者の肥やしになるというセオリーを彼女は体現していた。

栃木県	2010	1030 × 686	ジクレー
-----	------	------------	------



指原莉乃  
ある日の朝、リビングの窓のカーテンを開けると見渡す限り町は崩壊していた。そして遠くに壊れかけた原発の煙突がもくもくと放射能の煙を上げていた。指原莉乃と同世代の女性が見た夢だ。撮影の直前、その夢の風景を想像できるかなと耳元で囁く。軽く閉じた眼を彼女が開くと、視線はその風景を見ていた。いつも笑顔を振りまく彼女の深層にあの夢のリアルが眠っているということは、それはひとつの時代を生きている証のように思える。

東京都	2015	1030 × 686	ジクレー
-----	------	------------	------



伊藤詩織  
メディアは人格の一つの像に作り上げる。彼女がレイプドラッグの告発者としてメディアの前に顔を出した第一印象は強烈であり、その冷静な立ち振る舞いによって強い女のイメージが形作られた。その後インタビューのためにわたしの仕事場を訪れた彼女は意外にも今回の出来事で一人落ち込み「いのちの電話」に何度も電話を入れたと語った。だが電話はなかなか繋がらず「世の中どんだけ死にたい人が多いんだろう」と思ったと言う。世間から注目を浴びる前の、事件に巻き込まれ、たった一人悩みの淵にさまよった伊藤詩織は若い女性の誰もがそうであるように、揺らぎや弱さを併せ持つ普通の女性だったのだ。


東京都	2017	1030 × 686	ジクレー
-----	------	------------	------

## 日本巡礼

本当の美しさは何でもない日常にひそんでいる。

	菜の花の道行きて夏。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	恋。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	飛ぶ鳥急ぐ雨。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	蜜柑も仏に見える四国の底力。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	光が撫でている。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	足元の真昼の夢。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	人生の終わりは定食でよい。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	大地蔵。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	大輪。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	雨の軒下、人生を中断している。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	幾世の春の過ぎ去りし 幾世の春の残されし。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	花冷え、ローソクで指温める。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	あこのろ。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	咲いて空を飾り 散って地を飾る。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	あの世のひと恋しくなる青闇。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	再会の地藏、 恥ずかしがる。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	朽ちて笑う。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	飾りあう命。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装
	花間蝶。	四国	2009	630 × 528 額外寸	ジクレー 額装

## 東日本大震災

	[書：藤原新也]		1989	680 × 1340	模造紙
		石巻 (宮城県)	2011	840 × 560	ジクレー
		石巻 (宮城県)	2011	840 × 560	ジクレー
		宮古 (岩手県)	2011	840 × 560	ジクレー





子どもの絵  
津波で崩壊した宮古の一軒の家屋に踏み込んだとき、床に散乱する家財の隙間に砂にまみれた一枚の子どもの絵が横たわっていた。“みやこばあちゃん” その余白にたどたどしいひらがな。生きていてほしい。シャッターを押してのち手を合わせる。 2011年 宮古(岩手)

宮古  
(岩手県) 2011 840 × 560 ジクレー



桜  
例年満開の時期には観光バスが何台も連なる日本有数の桜の名所。だが桜の周辺は無人だった。はじめて見る花付きと色に圧倒された。帰り道、近くの売店で花を賞賛すると「ここで三十年営業していますが、こんなに色と花付きの良いのははじめてです」と意外な答えが返ってくる。桜に近づき線量計を差し出す。セシウムの値は異常に高い数値をたたき出していた。ホルシミス効果。放射能は一時的に植物などのホルモンを刺激して活性化させるのだ。丘に登り、桜の全容を写す。命の危機の最後を飾り立てるような、不思議な美しさだった。 2011年 三春(福島)

福島県 2011 840 × 560 ジクレー



音のない世界  
無人の浪江町を歩く。自分の足音が聴こえた。不気味な静寂だ。「シーンと静まり返って、まったく音というものが聴こえないんです」広島の爆心地に最初に入ったカメラマンの言葉を思い出す。通りに霧雨が降ってきた。その霧雨の音さえ聴こえる不気味な静けさ。爆心地の静寂も放射能汚染地区の静寂も人間の行いによって出現した新たな奇妙な自然だ。 2011年 浪江町(福島)

三春  
(福島県) 2011 840 × 560 ジクレー

浪江町  
(福島県) 2011 840 × 560 ジクレー

あまねく照らされている  
東日本大震災の地上の死の風景を満月が照らし出す。あの世の死者への橋、恐山を朝日が照らし出す。光はあらゆる地上の生と死を照らし出す。わたしの眼に、それは時に残酷な光に、あるいは時に慈悲のような光に見えた。



観音  
満月が上がった。青い光が破壊し尽くされた地表を照らし出している。  
新月の闇夜ならその悲惨な光景を見ずにすんだものをと、一瞬、満月の残酷さを思う。だがしばらく見ていると、その太陽の100万分の1の微光は、優しみに満ちた青い光で打ちひしがれたわたしたちを優しく慰撫してくれている観音菩薩の光のように思えはじめる。

石巻  
(宮城県) 2011 2000 × 1333 ジクレー



太陽の眼  
恐山。2016年5月、早朝。濃い朝霧が立ち込めた。後ろを振り向くと、白い太陽がぼっかりと浮かんでいた。それはわたしと世界のすべてを凝視する眼のように見えた。

恐山  
(青森県) 2016 2000 × 1333 ジクレー



山口県 1992 840 × 560 ジクレー

## 寂聴



京都府 2012 2200 × 1466 ジクレー

寂聴の涙。  
わたしが寂聴さんに最初にお会いしたのは一九八九年のことだから今から三十三年前のことになる。それ以降数えきれないくらいお会いし、数えきれないくらい食卓を囲んできた。毎度のことながらあの快活な笑顔と声。わたしは寂聴さんのことを密かに「笑い観音」と名付けていた。喜と楽は当然のことながら、人間の艱難辛苦のすべてを笑いに包み込んだからである。奈落世界をさまようがごとき今の時代において、その笑い観音の姿と声は人々の心に光を灯した。だがそんな彼女も晩年は長年の並外れた活動もあり、ときおり病に陥った。寂聴さんはその都度復活した。まるで不死鳥のようだった。だが何度目かに倒れたおれ、その病状は大変深刻だった。体も気力も衰え、ベッドに臥せる日が続いた。そんな日、ある編集者が京都の寂聴さんを見舞いに訪れ、帰京してのち、わたしの所に報告にやって来た。携帯で撮った寂聴さんのお顔を見せられた。見るも哀れな憔悴しきったお顔だった。「見舞いに行かれますか」編集者は言った。わたしは少し考え「行かない」と言った。いくら歳を重ねようと、寂聴さんは女性だ。その憔悴しきった惨めな顔を男性に見られたくないはずだ。そんな思いで行かないと言ったそのわたしの判断が正しかったのか、そうでないのかは分からない。それは寂聴さんの思いではなくわたしの思いだからだ。そんな中、何とかしてわたしは寂聴さんに声をかけたいと思った。いや文字で伝えたいと思った。彼女は文字の人だからだ。わたしは硯で墨を磨り、ちょうど傍らにあった手のひらサイズの折帖を手に取り、一気に筆を走らせた。無心だった。何かを伝えたいの思いだけで、ほとぼるのように言葉が出た。筆を走らせたのは二、三分程度ではなかったかと思う。これでかこれでかという奈落の言葉がほとぼり出た。

人は  
手折れ  
足折れ  
減入り  
しおれ  
悲しみ  
不安を抱え  
苦にさいなまれ  
ゆらぎ  
くじけ  
うなだれ  
よろめき  
めげ  
悲しみ  
涙し  
孤独に締め付けられ  
心忘れ  
心折れ  
打ちひしがれ  
うろたえ  
奈落の底に落ち  
夢失い  
それでも  
生き  
生き  
生きている

平成二十二年十一月十七日  
虚新

編集者はその折帖を携え、京都に向かった。そして病床の寂聴さんに手渡し、遠くで見守った。寂聴さんはベッドの上で半身を起し、折帖をめくりはじめる。「遠くから見えたんです。寂聴さんの眼が涙を湛えて光るのが」あの笑い観音の寂聴の涙。それは想像だにできぬ姿である。多分後にも先にもその編集者だけが「寂聴の涙」を見たのではないかと想像する。言葉を贈ったわたしはその涙を見なかった。それが寂聴さんにとって、そしてわたしにとって、よかったことなのか、そうではなかったのか、いまだに判断としない。



[書：藤原新也]

2010 1940 × 3720 屏風

死ぬな生きろ

寂聴さんの前で「死ぬな生きろ」の言葉を二枚大書した。人の人生は一回こっきり。死んだがごとく生きるな、との意味が込められている。それを屏風仕立てとし、その一枚を寂聴さんが、ほかの一枚を藤原が所有した。東京と京都でこの言葉が呼応し合い、あまねく人々の上にも降り注ぐことを願ってのことだった。

## バリ島

バリの雫

海、山、川、雲、空、そして花々。そのすべてが奇跡だ。地球は美の錬金術師であり、二〇万種もの異なる色とりどりの花々は地球四十六億年の歴史の賜物だ。哺乳類、鳥類、昆虫、植物、それら一億種の生物は、こそって地球の美の錬金に寄与してきた。だがその一億分の一の生き物に過ぎないヒトが四十六億年をかけて作り上げてきた地球の美をいま壊そうとしている。



まゆげ犬はかわいい。まゆげ犬はひっこみ思案。まゆげ犬はひとなつこい。まゆげ犬はめんこい。まゆげ犬はかなしい。まゆげ犬はおくびょう。まゆげ犬は、きき耳を立てる。まゆげ犬は、気持ちを読む。まゆげ犬は、さみしげ。まゆげ犬は、名無し。

バリ島 1998 1030 × 686 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 1000 × 1000 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 3000 × 3000 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)

バリ島 2000 600 × 600 ジクレー (インドネシア)



## 禁足の森



沖ノ島 2014 可変 インク (福岡県) 4枚 / 全6枚組 ジェット
















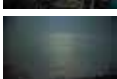
## 藤原新也の私的世界

表現にはその人の生い立ちが干渉している。豪放磊落に生きた明治生まれの父、新太郎が満州を起点に北方馬賊と交わったのは二十四歳の時であり、藤原が日本を出た二十四歳と重なり合う。港町という旅人の行き交う街に生まれ、その後破産によって家も郷里も失った過去も旅を後押しした一因であったかもしれない。満一歳からの少年期の旅「原初の記憶」。郷里、門司港「少年の港」。父、新太郎の臨終「最後の微笑」。幼少の頃から藤原の旅は、あの世とこの世を行き交うがごとくだ。

### 原初の旅

わたしは北九州の港町、門司港に生まれた。そして幼児期から少年期にかけ三つの旅を行なう。一つは門司港が空襲に見舞われる折に空襲を避けて疎開した山口県の日本海側の津波敷である。わたしはこの一歳の時の旅の光景を鮮明に覚えている。とりわけその津波敷の静かな海の光景は原風景として深く心身に刻み込まれている。二つめは小学校五年の時の夏休みに訪れた山口県の柳井である。柳井には肺結核患者を隔離する病院があり、この病棟にわたしを子どものように可愛がってくれた母の姉、春子がすでに死を宣告される姿で入院していた。百合の花のようにほっそりとした色白の春子は結核患者固有の透き通るような肌となり、その美しさが少年の目に刻み込まれる。そして病院前の風光明媚な瀬戸内海と春子の死を想う気持ちが重なり合う。三つめは十六歳の折に生家が破産し、無一文で一家が流れ着いた湯治場鉄輪である。家を失い、故郷を失い、友を失い、孤独と不安の中、六畳一間に移り住んだ少年は湯治場の優しい人々や、方々に立ち昇る湯気に心を癒やされる。

二〇二二年の夏、本展覧会に際して放映されたNHK「日曜美術館」のロケで、わたしはそれら自らの感性を形成した三つの土地を巡った。だが戦後の社会や環境の変化は日本の風景をも劇的に変貌させており「撮るものがない」とつぶやかざるを得なかった。しかし砂中に針を拾うが如く、小さな美しきものたちにレンズを向けた。「わたしもあきらめず生きようと思います」その藤原の姿をテレビで見た二〇代の女性は言った。今日、世界はすべてのものが瓦解している。これから生きて行く希望が見つからない。だが失われた風景の中で、雨の中、藤原さんが、砂まみれになり、地に這いつくばって浜辺の百合にレンズを向けているその姿を見て、そしてテレビ画面の中で一匹のバタがその白い花びらに止まった奇蹟の瞬間を見て、わたしもあきらめずに生きていきたい。そう思ったと、彼女は言った。

	雲に道を訊く。	津波敷 (山口県)	2022 A2	ジクレー
		門司 (福岡県)	2022 A3	ジクレー
		門司 (福岡県)	2022 A3	ジクレー
		鉄輪 (大分県)	2022 A3	ジクレー
	撮ると レンズ向け 君の眼 わたしの命見ている。	門司 (福岡県)	2022 A2	ジクレー
		門司 (福岡県)	2022 A3	ジクレー
		門司 (福岡県)	2022 A3	ジクレー
		門司 (福岡県)	2022 A3	ジクレー
		鉄輪 (大分県)	2022 A3	ジクレー
		鉄輪 (大分県)	2022 A3	ジクレー
		鉄輪 (大分県)	2022 A3	ジクレー
	ひろーい景色の中 ふたつのちいさな脈拍	柳井 (山口県)	2022 A2	ジクレー
		柳井 (山口県)	2022 A3	ジクレー
		津波敷 (山口県)	2022 A3	ジクレー
		鉄輪 (大分県)	2022 A3	ジクレー
	嗚呼！ 眼の前に あの世が満ちている。	津波敷 (山口県)	2022 A2	ジクレー

### 少年の港

少年の港  
わたしは高校二年のとき家業の旅館が破産し、郷里を離れて以降三十年間帰郷しなかった。だが世界放浪の旅をひとくぎりしてのち、旅の鳥が止り木を求めるかのようにその地を踏む。すでに遠い異郷となったその街への道行きは、それもまたひとつの旅のようだった。わたしはその旅で連絡船に乗った自らの少年期の後ろ姿を見つける。そして少年期の思いを胸に故郷の街を歩く。港。潮騒。カモメ。平民食堂。オムライス。安全入船食堂。ラーメン。ナポレオン食堂。カツレツ。運動場。空高く上がる白いボール。終着。門司港駅の一直線の長いホーム。わたしは少年期の駅のホームを思い出す。プレーキの大きな軋む音とともに蒸気機関車がホームに入って来る。停車した蒸気機関車からもくもくと吐き出される蒸気の雲の中からひとりの男が立ち現れる。父だ。父は近づいて来ると無言で少年の頭を撫でる。あの幻の父の手のイニシエーション。  
一 港町。門司港。

